

<p>5日 (日)</p> <p>マタイ 5章</p>	<p>「心の貧しい人々は幸いである。天の国はその人たちのものである」(3節)。主イエスは「幸い宣言」をもって宣教活動を始める。この宣言は「格言」ではない。主イエスが「誰と共に生き、天の国の幸いを分かち合おうとしているか」を示した覚悟の言葉である。今日、共に歩まれる主の励ましを聴いていきたい。</p>
<p>6日 (月)</p> <p>マタイ 6章</p>	<p>「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」(33節)、「だから、明日のことまで思い悩むな。…その日の苦勞は、その日だけで十分である」(34節)。主なる神に願い求めることと委ねること。第一のことがらと第二のことがら。その違いを見極める霊的な知恵と、委ねるべきことを主に委ねきる信仰を与えたまえ。</p>
<p>7日 (火)</p> <p>マタイ 7章</p>	<p>「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い」(12節)。わたしにとっての「狭い門」とは何か。主イエスが選び、歩まれた道が「命に通じる門」を教えてくれている。人々がもてはやし、押し寄せる門ではなく、先立つ主イエスの背中を見失わずに、従っていきたい。</p>
<p>8日 (水)</p> <p>マタイ 8章</p>	<p>「ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕は癒されます」(8節)。主イエスに対する、ローマの百人隊長の信頼の言葉。植民地の人々を見下ろしていたであろう隊長が、馬を降り、身を低くして「ひと言」を求めている。今日、わたしも馬を降り、ただ主の言葉を信頼し、求める信仰を教えてください。</p>

<p>9日 (木)</p> <p>マタイ 9章</p>	<p>『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。』(13節)。 神の前で人と人とが一緒に生きる時に一番大切なものは何か。「行って学べ」と、主イエスは招く。「自分の正しさ」に固執するのではなく、「自分こそ罪人」と認めるところから、神の憐れみが見えてくる。</p>
<p>10日 (金)</p> <p>マタイ 10章</p>	<p>『ただで受けたのだから、ただで与えなさい』(8節)。ただで神から受けたものを、他者に出し惜しみしたり、まるで自分の努力で手に入れたもののように恩着せがましく用いるなど、主イエスの言葉は厳しい。「ただで受けた最大のもの。それは神の愛」。その愛には主イエスご自身の尊い犠牲があることを覚えたい。</p>
<p>11日 (土)</p> <p>マタイ 11章</p>	<p>『わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛(くびき)を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。』(29節)。くびきは、土を耕すために二頭の牛の首にかけて一緒に引くもの。主イエスが共に歩み、共にくびきを負ってくださり、わたしの人生は耕されていく。その安らぎに勝るものはない。</p>
<p>12日 (日)</p> <p>マタイ 12章</p>	<p>『正義を勝利に導くまで、彼は傷ついた葦をおらず、くすぶる灯心を消さない。異邦人は彼の名に望みをかける』(20-21節)。人は、善悪に心を向け、神のしるしをもとめてしまうが、主イエスが目を注ぎ続けたのは、神から与えられる一つひとつの命。わたしたちも命に目を向けて、礼拝を共にささげたいと願います</p>